児童用時間管理尺度の開発と信頼性・妥当性の検討

○井邑智哉¹・高村真広²・岡崎善弘³・徳永智子³

(¹佐賀大学・²広島大学・³岡山大学)

キーワード：時間管理尺度，信頼性，妥当性

Development of Time Management Scale for children and Its Reliability and Validity
Tomoya IMURA¹, Masahiro TAKAMURA², Yoshihiro OKAZAKI³, Satoko TOKUNAGA³
(¹Saga University, ²Hiroshima University, ³Okayama University)
Key Words: Time Management Scale, Reliability, Validity

目 的

これまでの時間管理に関する研究は，主に大人を対象として行われている。そのような背景には，「時間管理が必要なのは大人」という前提があると考えられる。しかし，時間管理の必要性は大人ほどではないにしても，現代の小学生や中学生にとっても高い（徳永・井邑・高村・岡崎，2014）。学校が終わった後に習い事や塾などに通う児童生徒は非常に多く，文部科学省の子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告（2008）によると，73%の児童が習い事に通っており，26%の児童は塾に通っている。また，森田・山口・奥山・福田（1999）は，高学年児童に，生活に対する忙しさの意識について調査した結果，6%の児童が「忙しすぎる」，40%の児童が「忙しい」と感じていると回答した。また，忙しいと感じている児童ほど，「頭が痛くなる」，「体がだるい」など心身の不調を感じることを明らかにしている。限られた時間の中で何がどれくらいできるか，何をしないかを考え，時間の管理を行うことは，現代の児童生徒が充実した生活を送る上で必要なことのひとつといえる。

もし時間管理がうまくできずに困っている子どもがいれば，その子どもに対して時間管理の方法を伝えるなどの支援が必要となる。ただし，児童生徒の時間管理に関する研究は端緒についたばかりであり，その数は少ない。本研究では，児童の時間管理を測定する尺度を作成し，その信頼性（内的整合性）と妥当性（因子的妥当性，基準関連妥当性）を検討することを目的とする。なお基準関連妥当性を検討する指標としては，先行研究から関連が示唆される根気強さと心理的ストレス反応を取り上げる。

方 法

調査対象者

2016年1月に，小学校5年生149名（男子77名，女子72名），6年生136名（男子68名，女子68名）を対象に調査を実施した。

質問紙

(a) 児童用時間管理尺度：予備調査と先行研究（Bond & Feather, 1988; Britton & Tesser, 1991; 井邑ほか, 2016; Janeslätt et al., 2008; Macan, 1994; White et al., 2013; Xu, 2008）から作成した24項目を用いた。(b) 短縮版 Grit 尺度（Duckworth & Quinn, 2009）。(c) 小学生用ストレス反応尺度（嶋田・戸ヶ崎・坂野，1994）。

結果と考察

児童用時間管理尺度の構成

児童用時間管理尺度24項目に対して，最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の推移と累積寄与率から，2因子解が妥当であると判断した。そこで，2因子を仮定し，一つの因子にのみ絶対値.40以上の負荷を示し，複数因子への絶対

値の差が.10以上であることを基準として項目選定を行い，該当しない項目をその都度削除しながら，最尤法，プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，7項目が削除され，17項目2因子構造を得た。

第1因子は，「自分で時間を決め，宿題に取り組んでいる」や「学校に遅刻しないように早めに家を出るようにしている」など，計画的に時間を使う因子であると解釈し，「計画的な時間活用」と命名した。この因子は，Britton & Tesser（1991）による短期の計画，長期の計画，Macan（1994）による構造化，計画，予定，井邑ほか（2016）の時間の活用に対応する因子であると考えられる。

第2因子は，「宿題などやるべきことがあっても遊びを優先してしまうことがある」や「ダラダラと時間を過ごしてしまうことが多い」など，時間管理をせずに時間を過ごす因子であると解釈し，「無計画」と命名した。この因子は，Macan（1994）の秩序への好みにおける，秩序の部分と，井邑ほか（2016）のその日暮らしと対応する因子であると考えられる。

2因子解での因子的妥当性を検討するため，確証的因子分析を行ったところ，GFI=.975，AGFI=.954，RMSEA=.042という十分な適合度が示された。下位尺度の α 係数は.82，.80の値を示しており，内的一貫性が確認された。

基準関連妥当性

児童用時間管理尺度の基準関連妥当性を検討するために，基準変数との相関関係を算出した（Table 1）。その結果，計画的な時間活用は，根気強さと正の相関，無気力，不機嫌・怒りと負の相関が見られた。無計画に関しては，根気強さと負の相関，無気力，不機嫌・怒りと正の相関が見られた。先行研究（Bond & Feather, 1988; 井邑ほか, 2016; Lay & Schouwenburg, 1993; Macan, 1994）に照らした場合，時間管理は，根気強さと正の関連，ストレス反応と負の関連を示すことが予想される。計画的な時間活用と基準変数との関連を見ると，いずれも予想される正，あるいは負の相関関係が示された。一方，無計画に関しては，時間管理をしないということから考えて，根気強さと負の関連，ストレス反応と正の関連を示すことが予想されるが，分析の結果，いずれも予想通りの正，あるいは負の関連が見られた。以上の結果から，本尺度の下位尺度は一定の基準関連妥当性を有していると判断された。

Table 1 児童用時間管理尺度と他の尺度との相関係数

	計画的な時間活用	無計画
根気強さ ($\alpha=.74$)	.55 **	-.59 **
無気力 ($\alpha=.85$)	-.40 **	.59 **
不機嫌・怒り ($\alpha=.84$)	-.20 **	.45 **

** $p < .01$